

第 1 部

立命館大学での学び

第 1 章

大学で学ぶということ

大学での学びとは何か

大学での学びは、この世界の根源に関わる問いを自ら発見し、その解を見つける営みです。喜び感動する体験を通じて、世界の中に新しい意味を見出す感性が育まれ、問いに近づく新たな可能性が見出されます。正しく問うことのできる基礎力を養うためのリベラルアーツを修め、研究倫理をわきまえた上で、挑戦を通して豊かな感動体験を重ね、自分なりの答えを見つける「知的な旅」に出てください。



学長 仲谷 善雄

知的創造の場としての大学

ICTによる社会の情報化は、今日すでに、コンピュータやスマートフォンなしに人が一日も過ごすことができないまでに進んでいます。人間の身体を含むモノとモノとが、直接／間接的につながって情報共有されるIoT(あらゆるモノをインターネットに接続する技術)の時代、「Society 5.0」の社会が、すぐそこまで来ているのです。

このような変化は、私たちの備えるべき「知 knowledge」を根本的に変容させる可能性があります。知が扱う対象、すなわち、テーマや内容が変わりつつあるのはもちろんですが、そればかりではありません。知の形式、すなわち、知識摂取のあり方、知の伝達方式、知の記録方式までもが大きく変容しつつあるのです。思考方法それ自体が刷新されつつあると言ってよいでしょう。これまで誰も、見たことも、聞いたこともないような世界が、いま立ち現れつつある中、皆さんはまさにそれを大学で学んでいるのです。

大学での基本的な学びは、この世界の根源に関わるものです。宇宙はどうなっているのか、地球はどうなっているのか、生命はどこから来たのか、人間とはどのような存在か、次の社会はどうあるべきか、などを自ら問い、答えを見つける営みが行われています。問いが多岐にわたっていますので、それぞれの問いを深めて探求するために専門分化し、現在のような学部・研究科になっています。各学部・研究科は、それぞれに独自の問いを持っており、特徴ある探究の方法で真理に近づこうとしているのです。

現代は多様性の時代であると言われています。一方で、他者の排除や対立が進行しています。また貧困や格差などの問題も広がっています。国連は世界に共通する課題として持続可能な開発目標(SDGs)を定めています。大切なことは、他者に尊敬の念を持ち、他者と自分の違いを理解して認め、積極的にコミュニケーションをとって、協力しながら問いに取り組むという姿勢です。そのような姿勢を育むには、世界の中から新たな意味を見出す感性と、それを支える豊かな感動体験の蓄積が欠かせません。喜び感動する体験から、問いに近づく新たな可能性が見出されるのです。

重要なことは、問いが個人の自由な意思に委ねられているということ、すなわち学問の自由が保障されていることです。大学・大学院は、この条件を何としても守らなければなりません。あくまでも学問は、真理を探究するものであり、広く人類の平和と民主主義に資するものでなければなりません。一部の者や組織のために利用されてはならないのです。これに加えて、他者の研究成果を無断で流用しない、研究内容のねつ造や改ざんを行わない、研究資金を適切に使用する、人や動物を対象とする実験に関する約束事を守る、など、自由な研究を保証せんがために守らなければならない研究倫理があります。このことはしっかりと意識してください。

参考文献

吉見俊哉『大学とは何か』岩波新書 2011年

松尾豊『人工知能は人間を超えるか ディープラーニングの先にあるもの』角川EPUB 選書 2015年

大学での学び

研究倫理をわきまえた上で、研究に取り組むわけですが、その前に学習しておくべき重要な内容があります。それがリベラルアーツと呼ばれるものです。リベラルアーツは、日本では「教養」と呼ぶことが多いのですが、私は「問うための基礎力を養う科目群」と考えています。研究は真理探究の問いから始まります。そのとき、正しい解を得るためには「正しく問う」ことが必要です。解の出ないような問い、間違った解につながる問いでは、問うても意味がありません。正しく問える基礎力を養う科目群がリベラルアーツなのです。立命館大学では、教養教育や、学部ごとの基礎的な科目群がこれにあたります。複雑な社会問題の多くには、ただひとつの正解が「ない」ことが多いものです。そこでは、自らの問題意識を研ぎ澄まし、自らの視点で問題を発見し、解を得るための思考や行動をとることが求められます。まさに基礎力が必要とされているのです。自分なりの解を見つけたら、それを多様な考え方と比べ、相対的に見てみましょう。別な見方を得ることができるかもしれません。図書館で違う考え方の文献を調べてみるのもよいでしょう。友人と議論するのもよいでしょう。立命館大学では、教養教育改革を行って、リベラルアーツの充実を図っています。皆さんもそのような意識で基礎力を身に付けてください。さらに、学外でのインターンシップ、海外留学、旅、読書などを通じて、多くの感動を体験してください。

学びから研究へ

上で述べた基礎力を身に付けて、さあ研究です。多くの皆さんはゼミナール(演習)や卒業研究、卒業論文などにおいてはじめて研究と向かい合うことになります。そこでは、今までにない新しい視点や考え方が求められます。他者からの指示ではなく、自らの問題意識に基づいて、重要な問題に対して新たな解釈を行ったり、新たな解決方法を提案したりするのです。もちろん、多くの場合は簡単には目的を達成できません。考えあぐねたり、アイデアが出なかったり、期待した程の効果が出なかったりと、様々な壁に突き当たるでしょう。そのときに重要なことは、自らが自らに課している制約条件に気付き、それを意識化した上で、制約条件を緩めたり、はずしてみたりする試みです。これは「言うは易く行うは難し」です。例えば、当たり前だと思っていた常識に気付き、それを疑うということは、それまでの考え方や価値観の変更を強いられるもので、簡単にできることではありません。しかし真に新しい視点や考え方に到達するためには、どうしても通らなければならない過程なのです。自分はどのような常識にとらわれているのか、何が新たな挑戦の邪魔をしているのか、自らを見つめ、自らに問う必要があります。辛い、孤独な作業ですが、ときには他者から指摘されたり、失敗して気付くこともあります。感性を研ぎ澄まし、研究に向き合ってください。きっと素晴らしい成果が出てくると思います。

まとめ

様々なことに、勇気を持って挑戦してください。きっと新たな扉が開きます。立命館学園は、2030年に向けたビジョンとして、「挑戦をもっと自由に Challenge your Mind Change our Future」を策定しました。先を見通すことが困難な時代であるからこそ、挑戦を通して豊かな感動体験を重ね、学びを深めてください。

考えてみよう

- [Society 5.0] について調べてみよう。
- 大学で学びたいことを書き出してみよう。
- 教養とは何か、リベラルアーツとは何かを考えてみよう。

主体的に学ぶ、他者と学ぶ、学びのコミュニティをつくる

学生とは「学びの主体」であり、大学とは「学びのコミュニティ」であるといえます。高校までの学びと大学における学びの異なる点をよく理解し、「生徒」から「学生」となり、充実した大学生活をすごしましょう。

法学部 教授 高橋 直人



Ⅱ「生徒から学生へ」——大学の「自由さ」の意味を考える

みなさんは立命館大学に入学し、もう高校の「生徒」ではなく大学の「学生」となりました。ただし、学生という身分を得ただけではなく、これから大学の学びへとスムーズに移行し、実り多い学生生活を送っていくためには、それ相応の頭の切り替えが必要です。実質的な意味で「学生」になるということは、自らの知的関心や将来の目標に応じ、自分の意志で能動的に学びに取り組む「学びの主体」になるということです。その上でさらに大切であるのは、大学という学びのコミュニティにおいて積極的に他者と交流し、お互いに学び合うということです。「大学における学びは、正課授業にとどまらず、正課と連続した自主的学びの活動、正課外や課外自主活動、キャンパス内外を問わない活動において、多様な学生が主体的にコミュニティに参加することによって果たされるものである」（2011年度全学協議会確認）ということを中心に留めておいてください。

以上のように、一人ひとりが学びの主体となり、かつ、学びのコミュニティを通じて相互に学び合うということがみなさんにとって不可欠であるのは、結論からいえば大学における学びの特徴に由来しているといえます。それでは、大学における学びの特徴とはどのような点にあるのでしょうか。これを理解するためには、高校までの学びと対比しつつ、それと大学での学びがどう違うのかという角度から考え始めてみると話が分かりやすくなります。今までみなさんは、ひょっとすると、学校での勉強には自分で自由に決められる部分が少ない、窮屈だ、と思ったことがあったかもしれません。これに対し、立命館に入学してみて、みなさんはどう感じているでしょうか。大学の「自由さ」を前にして嬉しく思うと同時に、学ばずでの選択肢の多さ、選択の幅の広さを前にして戸惑ってしまうところもあるのではないのでしょうか。実は、この自由度の高さの意味を考えてみるのが、大学の学びの特徴を理解する手がかりになります。入学してから卒業するまでにどんな科目を受講し、どんな科目の単位を取得したか、大学での学びの中身は学生ごとに異なってきます。1週間の時間割も一人ひとり違うものになるということは、みなさん自身、いま実感しているでしょう。学修要覧を開き、シラバスにもアクセスし、みなさんが選択できる科目の多彩さと知の世界の広がりについてみてください。また大学生活における学びと成長の場として、通常の授業(正課)以外にも、正課外の学びのプログラムや、クラブ活動などの課外自主活動といった様々なものがあります。これらの総体としての豊富な選択肢の中から、みなさんは4年間の学びのメニューを自由に上げることができるのです。

参考文献

- 阿部謹也 『大学論』 日本エディタースクール出版部 1999年
 潮木守一 『フンボルト理念の終焉？ 現代大学の新次元』 東信堂 2008年
 沢渡友哲(編) 『大学入門—政治と経済を学ぶマナーとスキル』 北樹出版 2011年
 高橋直人 「近代ドイツの法学教育と学びのプラン(Studienplan)」 『立命館法学』 2010年3号 (第1編第1章第2節「近代ドイツの大学像と『フンボルト理念』」参照)
 別府昭郎(編) 『＜大学＞再考—概念の受容と展開』 知泉書館 2011年
 立命館大学 「学園通信 RS 全学協議会特別号 2011年度全学協議会に向けて」 (http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/category/tokushu/110617/img/110617_zengakukyo_pdf_kakunin.pdf)

高校の学びと比べて、なぜ大学の学びの自由度が高いのかということについては、高校および大学、双方の学びの目的を考えてみると理解しやすくなります。学校教育法第50条によれば、「高等学校は、中学校における教育の基礎の上に、心身の発達及び進路に応じて、高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする」ものであり、この目的を実現するために「国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと」(同第51条第1号)や「社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと」(同第3号)などが目標として掲げられています。その上で実際に教えられるべき内容に関しては、国全体としての一定の統一性をもった基準が、文科省の「高等学校学習指導要領」で定められています。つまり、高校での学びというのは、義務教育で学んだことを発展させつつ、社会人・市民としての生活に必要な共通の基礎力を主として習得する段階にあたります。同時に、大学でのいっそう高度な学問に取り組むための基礎学力をしっかりと身に付けるべき時期でもあります。したがって高校の生徒は、それぞれの学問分野の基本的な了解事項となっているレベルの知識や、社会の幅広い場面で必要となる汎用的な能力・姿勢を、一応の「手本」や「答え」のあるかたちで教師から「習う」あるいは「教わる」という立場で学ぶことになります。みなさん自身の経験からしても——とりわけ大学受験との関係では——そのようにいえるのではないのでしょうか。

これに対して「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」ものです(学校教育法第83条)。ここでは、普通教育を担う高校の場合とは異なり、何をどう学ぶのかについては学生一人ひとりの選択に委ねられているところが大きいといえます。高校までの学びで身につけられた汎用的・共通的な基礎力の上に立ち、大学の学生は、各人の興味・関心や将来の進路に応じて正課の科目を履修し、正課外の学びや課外自主活動などに参加し、幅広い選択肢の中から学びの機会を能動的に選び取っていくことになります。このように、主体的決定に基づく多様な学びを大学では想定しているからこそ、学生一人ひとりに対し、自らの学びの進め方を選択するにあたって広範な自由が認められているのです。

■ 大学で学問に取り組むために——主体的な判断と論理による説得

また、大学の学びの中では、高校までの段階で学んだ基礎を前提としながらも、そこで教わった一定の「正解」を超えて、いまだ結論の定まっていない、専門家の間でも見解の分かれるレベルまで踏み込んで論ずることがしばしば求められます。たとえば、ある問題をめぐって、A説、B説、C説……と、異なる学説が主張され、論争が行われているような場合には特にそうです。学界において「通説」的な考え方がほぼ確定されている場合や、社会的にみて一定の「常識」としての理解が定着している場合であっても、その現状に満足するのではなく、日々変化する社会情勢や最新の研究動向をふまえた上で批判的に再検討してみるよう、大学では求められることもあります。要するに大学の学びにおいては、「正解は決まっているのだから、それを選んでおけば大丈夫」という話にはならないということです。複数の異なる結論が併存し得る問いに対し、どのような結論をどのようにして主張するのかは、みなさん一人ひとりが主体的に判断しなければなりません。つまり、みなさんが大学で学んでいく中では、お手本通りの筋道を辿ってひとつの正しい「答え」に到達することが目標となっているわけではないのです。むしろみなさんの主張が——成り立ちうる適切な結論のひとつとして——他の学生や教員からみて納得できるものであるかどうか、見解の異なる者の目から見ても説得力をもっているか、ということが重要になります。みなさんは、自分の結論そのものの妥当性、結論の根拠の妥当性および根拠から結論に至る論証の筋道の妥当性について、首尾一貫した論理でもって相手を説得しなければいけません。このとき、もしもみなさんが、自ら十分に考えずに他人の見解を鵜呑みにして結論を述べてしまっていたとしたら、どうやってその結論に至ったのかをうまく説明できず、答えに窮することになるでしょう。そうではなくて、問題となっているテーマに対するみなさん自身の考え方が明確に存在した上で、これをもとに熟慮し本人が判断してこそ、結論に至った根拠や筋道を自分自身の言葉でいきいきと表現できるのです。また、プレゼンテーションの準備

やレポートの作成にあたっては、自らの主張を裏付けたり補強したりするために資料を収集し、効果的に用いなければいけません。そのためにどのような典拠をどういう文脈で使うのかについても、各自の問題提起と結論、論証の流れ、調査方法等の違いに応じて方針は様々に異なります。これまた、他人任せでは決まらない、皆さん自身が決めなければならないことです。以上のように、まさにみなさんの主体性が決定的な鍵となるということは、授業中の質疑応答の場合であっても、定期試験に解答する場合であっても、卒業論文やレポートを執筆する場合であっても同様です。

■ 立命館ならではの学び——多様なコミュニティを通じた学び合い

ただし、自分ひとりで勉強するだけで大学の学びが完結するわけではありません。大学での学びにおいては、前述のように、同じ問題に対して複数の異なる結論が並び立ち得るものです。同じ結論を主張する者の間でも、その根拠や、結論に至る論証の仕方がそれぞれ異なる場合もあります。そうであるからこそ、自分とは見解の違う者の意見にも耳を傾け、学び合うことがいっそう重要となるのです。共通のテーマについて、複数の人間がそれぞれ異なる切り口から議論し合うことを通じ、ひとりでは気づかなかった論点や探せなかった情報なども互いに得ることができます。ひとりだけで考察するよりも遙かに多面的・重層的に理解が深まってくるものです。あるいは他者に自身の考え方を説明してみることにより、自分の頭の中がいっそう整理されますし、知っているつもりでも実は理解が不十分であったような部分に気づくことができます。以上のことは、仲間内での気楽な勉強会から、授業中のグループワーク、さらには学会や国際的な規模のシンポジウムまで、学問を志す者が集う場にはおおむね当てはまることです。考えるだけでなく、議論することが学問には不可欠なのです。新入生のみなさんに身近なところでは、基礎演習などの小集団科目の中でディスカッションやディベートを経験してみると、学び合いの楽しさや有効性を実感できることでしょう。

仲間との学び合い(ピア・ラーニング)のための機会が、立命館には豊富に存在します。正課の授業においては各回生に配置されている小集団科目が主となっており、中でもゼミは、大学における学びのコミュニティの代表的な例です。一般的にゼミは3、4回生時に置かれることが多く、特に卒業論文やゼミレポートの作成を通じ、学びの集大成の場となっています(科目名や配当回生等、学部によって詳細は異なります)。たとえば法学部の場合、3回生の「専門演習Ⅰ・Ⅱ」と4回生の「卒業研究」がこれに相当します。正課の授業では同回生の学生と学び合うことが多いにせよ、1回生の小集団科目においては、みなさんがスムーズに大学の学びへと移行できるようサポートしてくれる上回生(オリター、エンター)が心強い仲間となりますし、ゼミの場合には上回生の先輩と合同で学ぶこともあり得るでしょう。さらに、たとえば各学部のゼミ大会や、大学間のゼミ交流会など、正課と関わりの深い正課外の学びにおいては、クラスやキャンパスの枠を越えたいっそう幅広い学びのコミュニティに参加することができます。より大きなレベルからいえば、一方で正課の授業と、他方で正課外の学びやクラブなどの課外自主活動とは、みなさんの広い意味での学びと成長にとっていわば車の両輪のようなものである、と立命館においては考えられています。特に、リーダーシップや協調性、調整能力、企画力などの社会生活にとって重要な力については、課外活動の場で養われることも多いものです。ちなみに正課外の学びや正課の準備等にかかわって、みなさんの学び合いの空間となる「ラーニング・コモンズ」の整備も進んでいます(たとえば本学図書館の「ぴあら」など)。近年では、国際的な大学間の連携強化や留学生の増加にともない、国籍や文化を越えた学びのコミュニティに参加できる機会も増えてきました。グローバル化の中で世界を舞台に夢に挑戦することを目指して、まずは身近な国際交流から気軽に始めてみるのもおすすめです。

■ 近代的な大学の「原点」にふれてみよう——いわゆる「フンボルト理念」を素材として

以上にみてきたような、「学びの主体」としての学生像や「学びのコミュニティ」としての大学像を含め、大学にかかわる文化は国際的なスケールの中で歴史的に形成されてきたものです。このような大きな流れ

が本学のキャンパスにも息づいており、その上にみなさん一人ひとりが立っているということに視野を広げてみるための機会を、最後に提供できればと思います。そのための素材として、近代的な大学の出発点とされるドイツのベルリン大学の創設(1810年)を主導したヴィルヘルム・フォン・フンボルト(Wilhelm von Humboldt, 1767-1835)の唱えた理念を、みとめることにしましょう。大学およびそこの学問のあり方についてフンボルトの掲げた考え方は、欧米諸国のみならず世界各国に影響を与えており、明治時代以降の日本の高等教育においても、大学論の典型的なモデルのひとつとされてきました。高等教育の「ユニバーサル化」や「大学全入時代」といわれる現状を前にすると、少数のエリート養成を念頭に置いた19世紀はじめのフンボルトの考え方の中には、21世紀の大学に対して単純には適用し難い部分もたしかにあるでしょう。それでもなお、古典から知を汲み取り、歴史的な原点に立ち帰って大学を見つめるという姿勢からいえば、フンボルトの主張を通じて私たちが示唆・刺激を受ける点は今も尽きません。

さて、フンボルトによれば、大学以前の段階の学校では、「学問的な理解や熟達がそれなしには不可能であるところの、諸能力の訓練および知識の獲得」を目的とし、「できあがった解決済みの知識」を「習う」のに対し、大学とは「常にいまだ完全には解明されていない問題として学問を取り扱う」ところであるとされます。「解明されていない問題」が大学で取り扱われるというのは、教員が研究者として真理を追求する活動だけをさしているのではありません。学生も、教員の導きのもとで共に知の最先端にふれ、それを自分なりに受け止め、学問の深化の担い手となるということを意味します。すなわち学生は「もはや習い手ではなく自ら研究するのであり」、教員は「学生の研究を導き、支援する」とフンボルトは述べます。彼の言葉を借りれば、まさに「両者は学問のためにここにいる」のです。

あくなき学問的探求の場、学生と教員とによる新たな知の創造を伴う動的な学びの場としての大学像が、フンボルトの以上の考え方の基礎にあります。そこにみられる、いわゆる「研究と教育の一体性」は、伝統的な知を保管し継承することに主眼を置いていた従来の大学像に対し、当時としては斬新でした。これが「学問の自由」および「大学の自治」とともに近代大学の核心的な理念となります。さらにフンボルトは、一方で大学における「支配的な原理は孤独と自由である」とし、各人が学問とじっくり向き合って自由に研究を深めることを大切にしつつも、その上で「しかしまた人類の精神的活動は共同作業としてのみ進展する」と述べ、「志を同じくする者たちおよび同年代の者たちとの親密な共同体」の意義を強調するなど、常に他者とのコミュニケーションあるいは関係性の中で学びが行われるべきであるとしています。つまり、一人ひとりが自ら自由に研究する主体者であり、この能動的・自律的な個々人によって形成される学問のための共同体が、フンボルトの大学像の基本的な部分であるといえます。ちなみに、このような学びの共同体を制度的に具現化することを試みたのが、19世紀に同じくドイツで誕生した「ゼミナール」に他なりません。これが現代の日本においても受け継がれ、「ゼミ」という略称で親しまれつつ、大学の正課における学びのコミュニティのうち最も重要なものとなっていることは周知の通りです。みなさんに身近なところにも、目に見える影響がこうして続いているのです。

以上、近代の大学の歴史的な原点と向き合い、それでは現在の日本において、さらにはグローバル化した世界の中で、大学や学びのあり方を日々どのようにヴァージョンアップしていくべきなのでしょう。大学の主人公であるみなさんは、まさにそれを考えるべき立場にあります。みなさんの考える理想の大学の姿をぜひ私たちにも聞かせてください。学びのコミュニティの仲間として一緒に考えましょう。

● 考えてみよう

- ・高校までの学びと大学の学びが異なる点は、どのようなところにあるのでしょうか。これからみなさんが大学での学びへとスムーズに移行するためには、どんなことを心がければよいのでしょうか。
- ・立命館に存在する正課・正課外の多様な「学びのコミュニティ」について具体例を調べてみましょう。
- ・フンボルトの見解をどのように受け止めましたか。さらに、みなさん自身が理想とする大学やそこの学びの姿とは、どのようなものですか。

なぜ大学での学びを、高校までの学びとは「違う」と感じてしまうのでしょうか？

「大学での勉強って高校までとは『違う』って聞かし、やっていけるのかなあ？」と不安に思う人も少なくないと思います。なぜ大学の学習は高校までとは「違う」と感じるのでしょうか？ これをみていきたいと思います。



経済学部 教授 大川 隆夫

■ どうして大学での学習を高校までとは「違う」と感じてしまうのでしょうか？

みなさんに小学校から高校までの時に関する質問を5つします。正直に答えて下さい。

- 1 いろんなことに興味を持ち、「あれっ？」と思ったことがあれば、すぐに自分で図鑑や百科事典などで調べた。
- 2 丸暗記をせずに、覚える内容を筋道立てて理屈で理解するようにしていた。
- 3 わからないことをとことん考え、それが理解できた時、「あっそうか」と思って爽快感になった。
- 4 勉強の中で「これって前にやった**と同じじゃないか！」と思ったことがあった。
- 5 夏休みの「自由研究」では、自分でテーマを見つけ、張り切って楽しく取り組んだ。

どうでしたか？ 多分、これらの5つの項目にすべて「はい」と答えられた人は、少ないのではないですか？ では、これらの経験がどのように大学での学習に結びついているのかをみていきますね。

大学での講義内容に興味を持つことができるためには、そもそも受けるみなさんが知的好奇心旺盛でなければいけません。しかも、大学での講義は料理に例えるとレシピのようなものです。だからその面白さや深さを味わうためには、へたでも自分で「料理」を作らねばなりません。言いかえると、講義で習ったことを用いて現実の社会問題を考えたり、習った内容をさらに深めるために図書館でいろいろと調べたり、というようなことを面倒がらずにできることが大切になります。よって1の経験は大学での学習に役に立ちます。

大学で学ぶ内容は単なる知識の羅列ではありません。今論じられている内容の因果関係は何か？、どんな枠組みで内容を語っているのか？ ということに目配りが効かないと、中身が理解できません。丸暗記で済ませようと思う人もいるかも知れませんが、ただ、大学ではしばしば論文やレポートが課されます。自身の理屈を理解しておかないと、丸暗記では対処不可能です。よって2の経験も重要となります。

大学での学習は、間違ってもいいから自分でとことん考えて何らかの答えを出すことにあります。間違っても何か自分で考えついたことから得られる爽快感を味わっておくことは、大学で学習し続ける原動力になります。したがって、3の経験も大学での学習に必要です。

学習の目的の1つに視野を広げることがあります。これは小学校から大学まで同じです。たとえば、長方形の面積は縦×横で求められます。距離は時間×速度です。ということは、距離は、縦が時間、横が速度となる長方形の面積で表すことができます。私はこのことを知って「あっそうか！」でした。このような「あっそうか！」経験をするたびに、一見、関係なさそうなものにつながりを見出そうとする力が付いていきます。4の経験は、視野を広げる上で非常に有効ですので、大学での学習にも必要です。

参考文献

石原千秋 『未来形の読書術』 ちくまプリマー新書 2007年

内田樹 『先生はえらい』 ちくまプリマー新書 2005年

西林克彦 『あなたの勉強法はどこがいけないのか？』 ちくまプリマー新書 2009年

前にも書きましたが、大学では自分でテーマを決めて、締切を守って論文やレポートを書かねばなりません。夏休みの自由研究も締切があり、何らかのテーマでまとめた文章を作成しなければなりません。そういう意味では大学のレポートも自由研究も同じです。だから、自由研究において、自分でテーマを決めて、悪戦苦闘しながらも最後まで仕上げ、しかも締切に間に合わせた5の経験は、何ものに代えがたい「力」となります。しかも、ワクワクしながら取り組んだのであれば上出来です。論文作成が大学での勉強の集大成ですから。

以上のことから、小学校から高校までの学習経験をきちんと積んでいれば、大学での学びに不安を感じることはありません。高校までの経験不足が「わからないことが出てきたとき自力でどう対処すべきか」という「ノウハウ」の蓄積を生まず、大学と高校までのギャップを感じてしまうのです。

■ どんなふうに大学生を送ればよいのでしょうか？

では、上記の「ノウハウ」を蓄積して来なかった人はどうすればよいのでしょうか？ 安心して下さい！これから述べるような大学生を送れば、徐々に身についていきます。あせらず気長に取り組んでください。

講義を受けている時には、まず、講義内容の因果関係とその内容がどのような枠組で分析されているかに注意を払いましょう。注意するという姿勢が大事であって、わかるわからないはとりあえず置いておきます。次に、講義内容を復習しましょう。ここでは「しっかり理解できた」部分と「講義を聞いていた時はわかっていたのに今はわからなくなった」部分とを明らかにしましょう。講義を聞いてもわからない部分はとりあえずそのままにしておき、わかったつもりになっていた部分にのみメスを入れます。つまり、わかったつもりになっていた原因を究明します。この原因がわかれば、「わかったつもり」状態を防げます。加えて、わかったつもりの部分を、すぐに先生に質問に行かず、あーでもないこーでもないと考えてみましょう。これも正しい答えにたどり着けなくても構いません。考え続けるプロセスが大事なのです。先生に質問に行くときには、何がしかの自分なりの答えを持って行くように心がけます。

日常生活では以下の事柄を心がけてください。第1に、いろいろな「？」を集めましょう。本屋ではダメなのに生協で本を買って値引きしてくれるのはなぜ？なぜ講義は90分なの？立命ってどういう意味？などなど大学生を送るだけでいろんな「？」があると思います。そして、集めた「？」の内面で面白そうなものを調べてみましょう。さらに、あれこれ考えてみましょう。こういうことが歯磨き習慣のようになっていってほしいのです。

第2に、小説、マンガ、映画、ドラマのような「おはなし」を分類して、一文にまとめてみましょう。おはなしは、AからBに行く(成長物語)、BからAに戻る(童心を取り戻す大人の話)、AからB行つて帰る(浦島太郎)、BからAに来て帰る(かぐや姫)、の4パターンに分けられます。(()内は例です。)いろいろな作品がどのパターンに分類できるかを考えた上で、作品内容を一文にまとめることを通じて、物事の本質をつかむ能力が養われます。ちなみに、一文まとめの出来不出来なども気にしないことです。なお、長続きしないと思う人は、生協の読書マラソンに参加して、一言コメントを提出するのも良いと思います。

このような手立てを講じていく中で、自然に先に述べたノウハウが身についていきます。ノウハウが身につけば、小学校低学年の時に持ちえた「ワクワク」感がみなさんの中によみがえってくるはずですよ。

■ 考えてみよう

- 『未来形の読書術』を読んだ上で、読んだことのある小説や物語を一文に要約してみよう。
- 『先生はえらい』を読んで、「学ぶ」とはどういうことを考えてみよう。
- 『あなたの勉強法はどこがいけないのか？』を読んで、どのような勉強法をとればよいかを考えてみよう。

立命館で学ぶということ

「立命」という志(こころざし)を持って必死になって勉強すれば自分の進路や就職を新たに切り拓いていける、そんな思いが「立命館」という名に込められています。立命館大学で学ぶ機会を与えられたみなさんのミッション(使命)の1つは、平和という問題に向き合い、「平和にどう関わるか」を思考することです。平和社会の構築に関わるための知性を磨き、世界に羽ばたいてほしいと願っています。



産業社会学部 教授 前田 信彦

■ 大学生生活を始めるにあたって

いよいよ大学生活が始まりましたね。みなさんの中には立命館が第1志望だった人も多いでしょうが、逆に本命の大学に行けずに第2志望で入学した方もいるでしょう。いずれにしても最終的には自ら選択して、ここ「立命館」の門をくぐった。そのことをまず誇りを持っていただきたいと思います。

みなさんとは違って、本当は立命館大学に合格したかったけれど入学できなかった学生もたくさんいます。あるいは家庭の経済的事情でやむなく入学を断念した方もいるでしょう。そういう中であって、みなさんは立命館大学を志し、ここで学ぶ機会を与えられた。このこと自体、偶然のようでありますが、しかし「運命の糸」があるようにも思えます。言い換えれば、自らの「運命」が立命館大学という場で学ぶことを「よし」としたからともいえるのではないのでしょうか。これは素晴らしいことだと思います。「自分の人生の選択に『よし』」⁽¹⁾とすること、このことをまずはしっかりと自覚し、大学生活のスタートを切ってほしいと思います。

■ 「天命」と「知命」そして「立命」⁽²⁾

ところで上に述べた「運命の糸」は、東洋の思想によれば「天命」ということになります。大学を決めるという例を出すまでもなく、「自分で自分の人生を切り拓いている」ように見えても、実は「天命」といった働きによって、つまり自分の力を超えた働きによって自分の人生は決まってくるといえるのです。

それでは、自分の人生や寿命や仕事や進路はすべて「天命」によって決まってしまうのでしょうか？ 逆説的ではあるのですが、そうではない、というのが「立命」という意味です。どういうことかというと、人間には物事を知り、理解し、社会を変えていく力が与えられています。これを「知命」と言います。先ほどの「天命」があらかじめ我々に与えられた道であるとすれば、「知命」によって自分の道を変えていくこと、あるいは切り拓いていくことができるということです。実際、多かれ少なかれ、みなさん

参考文献

- (1) ダグ・ハマーショルド(鶴飼信成訳)『道しるべ』 みすず書房 1967年
「(人生に)よし」のフレーズは国連事務総長だったダグ・ハマーショルドの言葉です。ハマーショルドは在任前から日記を綴っているのですが、そこで旧約聖書の「詩篇」を引用しながら、自らの生き方に「よし」とすることを繰り返し述べています。
- (2) 袁了凡(無名上人訳)『和語陰陽録』 梓書院 2007年
「立命」の言葉は、『孟子』の「尽心章句」に由来します。「夭寿不貳，修身以俟之，所以立命也」、つまり「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味します。以下本論においては、孟子の言葉をもう少しわかりやすく例解した、中国の明時代の袁了凡(えんりょうぼん)という思想家が書いた『陰陽録(いんいつろく)』に依拠しながら、「立命」の意味を紹介します。日本語に翻訳されたものとして『和語陰陽録』(2007)がありますので参考にしてみてください。特に『第1章 立命之学』(29～64頁)を参照。なお、「天命」という言葉は、特に中国の古い思想の基調の1つです。「運命」や「宿命」とは異なり、人々の生き方の主体的側面に重きをおいた言葉ですので、ここでは「天命」と記述しています。
- (3) 最上敏樹『国境なき平和に』 みすず書房 2005年
先のハマーショルドの人生と平和活動に関しても国際法学者の最上敏樹氏が詳しく紹介しています。

のこれからの人生においても、自分の「思い通りにならない」と感じることもあるでしょう。しかしその中でも、自分に与えられた「天命」を知り、しかし「知命」によって自らの道を切り拓いていくことができる。これこそが「立命」という意味なのです。

■ 立命館で学ぶということ

もう1つ、進路や就職の例を考えてみましょう。自分に合った最適の職業を探して就職する、それは1つの目標としてはよいでしょう。しかし、多くが第1希望の会社や進路に進めるか、というところではありません。だいたい就職や進路は「儘(まま)ならない」というのが本当のところなのです。それは、自分では思い通りにならない＝天命によって自分の進路は規定されている、ともいえるからです。実際、自分がどんな親のもとに生まれるか、どんな家に生まれるか、あるいはどんな土地・場所で生まれるか、自分では決めることができないでしょう？ それは「天命」として受けとめるしかありません。

しかし、たとえどんなに貧しい家に生まれても、あるいは不遇の幼少時代を送ったとしても、そのことを悲観して生きるのではなく、「立命」という志(こころざし)を持って必死になって勉強すれば自分の進路や就職を新たに切り拓いていける、そんな思いが「立命館」という名に込められているのです。

かつて立命館大学には夜学があり、学生の多くは働きながら懸命に学問をし、自らの人生を切り拓いて世に羽ばたいていきました。夜学はかつての話ですが、現代のみなさんにとっても、「先が見えにくい時代に生きている」という意味で置かれた状況は同じでしょう。繰り返しになりますが、自分にあたえられた「知命」と力を振り絞って道を切り拓いてください。それこそが「立命館」で学ぶという意義なのではないかと思うのです。

■ 平和について思考すること

みなさんが立命館で学ぶことのもう1つの意義は、「平和」というテーマに主体的に関わる、ということです。ここでいう平和とは、戦争のない状態(消極的平和)だけをさすではありません。貧富の格差、性(ジェンダー)や人種の差別、宗教・民族の対立など、社会問題が山積している状態を無くしていく努力は「積極的平和」の構築と呼ばれています。立命館で学ぶ、ということは、積極的平和へ貢献するための知性を磨くということでもあるのです。

国際法学者の最上敏樹は、平和をつくるための教育として、リベラルアーツ(教養)を通して我々が身につけるべき「思考の姿勢」について述べています(最上、2005)。その1つは、「性急ではない姿勢」です。換言すれば「複雑さに耐えてそれをくぐり抜けるような、思考の粘り強さ」とも言えます。戦争が起きたときに、最初から反対だと言っただけで済ますのではなく、まず事態をしっかりと見つめ、何が問題なのかを深く考える思考の姿勢です。もう1つは、「熱狂に踊らされない、あるいは陶酔しない姿勢」ということです。集団への陶酔というのは、実は自己陶酔であり、自己陶酔に陥った人間は、自分の考える正義を、暴力を使ってでも他者に対して押し付けるようになってしまうものです。それを避ける知性を磨くこと、これもみなさんが大学で身につける大切な教養の1つではないかと思います⁽³⁾。

4年間、立命館大学で学ぶ機会を与えられたみなさんのミッション(使命)の1つは、平和という問題に向き合い、「平和にどう関わるか」を思考することです。それは同時に平和的な人間になるということでもあります。平和社会の構築に関わるための知性を磨き、世界に羽ばたいてほしいと願っています。

■ 考えてみよう

- ・参考文献に挙げた最上敏樹『国境なき平和に』には、「自己陶酔しない心を持つこと」あるいは「自分の正義を抑制すること」(199～223頁)と書かれています。ハマーショルドの『道しるべ』に書かれていることも併読しながら、「平和」を実現する行動に求められる「心的態度」とは何か、考えてみてください。

正しい判断基準と行動基準を培うために

再生医療や原子力発電など科学技術の受け入れ方について、社会は判断を迫られています。論理だけでは解決できない問題に対して、正しい判断基準と行動基準をもつ必要があります。大学で何を学んだら良いのでしょうか。



薬学部 教授 北原 亮

■ 大学の社会的役割と理系学問の倫理

ここでは、大学で学ぶ学問の倫理、特に理系的な学問の倫理について考えてみます。大学の社会的な役割について触れながら考えてみましょう。日本私立大学団体連合会などが出している私立大学経営倫理綱領によると、「大学は深く真理を探究し、成果を広く社会に提供する機関」であり、「教育や研究を通じた学生の人格形成に資すること」、「人類の学問的・文化的遺産を次世代に継承すること」が謳われております。大学とは、このような公共性の高い使命をおったところなのです。

真理の探究とはすなわち理系では科学技術研究(研究)です。大学は営利目的ではなく研究者の自由で独創的な発想から生まれる研究成果により学問の発展や社会に貢献する使命があるのです。ここでいう「研究者」とは、大学教員などをさしますが、大学での卒業研究や大学院における研究は学生の教育とともに行われるため、みなさんも大学がもつ使命の達成に少なからず関与していくことになります。大学で得られた研究成果は、学術論文として世界に情報発信され、学問の発展や社会への波及効果、すなわち新薬の開発や、みなさんが手にする新しい製造物のなにかに結びついていきます。ですから、良くも悪くも社会に波及するということを理解し、我々は研究活動に対して真摯に取り組み、研究結果に対しても誠実にしなければなりません。

また、大学は教育や研究を通じて君たちの人格形成や人材育成により社会に貢献しています。どのように人格形成に関わっていくかということは、学部の教学理念(教学ポリシー)や人材育成目的に定められています。例えば薬学部であれば、「医薬品等を通じて人の生命や健康にかかわるという使命感や倫理観を持ち、人類の健康と幸福に貢献し、グローバルに活躍できる人材を育成すること」を人材育成目的に掲げています。シラバスをみれば、学習する各科目について、どのような力がつくかが、学生が主語になり表現されています。しかし、大学が人格形成や人材育成にどれだけ努力しようとも、学生諸君の主体的な学びがなければ意味がありません。目標を持って主体的に学ぶこと、基礎から応用科目へと系統的に学ぶことが大切です。またこのような大学での主体的な学びを通じて幅広い教養と深い専門知識を習得していく訳ですが、単なる知識の習得ではなく、科学的な物事の考え方、学問や社会に対する接し方と心構えを学んでください。

■ 論理だけでは科学技術問題は解決できない

次に科学的な物事の考え方、学問や社会に対する接し方と心構えということについて考えます。科学技術は、我々の社会や生き方に大きな影響をもたらします。たとえば、原子力発電によりエネルギーが安定

参考文献

- 渡部昇一 『日本人の品格』ベスト新書 2007年
- 藤原正彦 『国家の品格』新潮新書 2005年

に供給され、飛行機や車、インターネット、携帯電話により便利で豊かな社会になり、医療の高度化や新薬の開発により、健康で長生きになりました。しかしときに科学技術は、地球環境や生物に大きな影響や危険をもたらします。そのため、日本でも社会の安全が確保されるように科学研究が法律により規制されています。たとえば生命科学分野では、「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物多様性の確保に関する法律」があり、遺伝子組換えを含む研究は、この法令を遵守して行われなければなりません。しかしながら、薬害問題などに代表されるように、当時の科学技術では理解が及ばなかった悪影響が、後々分かることもあります。再生医療分野では、科学技術の発展に対して、社会の生命倫理に対する考えや法整備が追いついていないような状況もあります。また原子力発電のように法律上適正に行われていても、経済的メリットと危険性というデメリットが社会的に対立するような状況もあります。エネルギーの安価、安定供給と原発事故によるリスクを論理的に評価しても、原子力発電所の要不要を判断することはかなり難問です。このように現代社会における科学技術の問題の多くは、さまざまな論理的な取り組みによっても未だ解決していない或は判断が困難な状態ということです。科学の世界で「論理」が大切であることは言うまでもありませんが、論理性や合理性だけでは問題は解決できていないのです。

II 「誇り」と「情緒」

では問題解決に必要とされるものは何なのでしょう？ 渡部昇一氏は著書『日本人の品格』で、日本はその独特の文明や武士道に代表される精神が「誇り」となり、世界を驚かすような科学技術立国として戦後の復興を成し遂げたと述べています。数学者である藤原正彦氏は著書『国家の品格』で、「論理」を用いて判断し行動する基準をもつこと、画一化する世界の中で日本人として情緒豊かな感受性をもつことが大切であると指摘しています。万葉集や源氏物語に代表される日本の文学など、日本人の情緒豊かな感受性から育まれた文化や伝統は世界からも高く評価される「普遍的価値」を生み出しました。日本における明治維新や科学技術立国としての戦後復興も、情緒豊かな日本人が、すばらしい日本の伝統に対する敬意と誇りをもって成し遂げたものであり、「誇り」や「情緒」こそが良い判断基準や行動基準となってきたのかもしれません。科学技術が人類の学問的・文化的遺産であると考えれば、それを次世代に継承するために、今後を担うみなさん自身が「誇り」と「情緒」をもって問題解決に取り組むしかないので。我々大学教員も、大学の社会における役割や、教育や研究を通じたみなさんの人格形成を担っていることに誇りを持っております。みなさんには、学問研究を通じ人類の発展に寄与していることに誇りを持ち、教養を深めることによりしっかりと情緒を育み、正しい判断基準や行動基準を醸成していただきたいと思います。大学生であるこの期間は、まさにそのための時間と言っても良いでしょう。このことは日本で学ぶ留学生の皆さんについても同じです。「誇り」や「情緒」から培われる判断基準や行動基準が、十人十色ではなく普遍的なものになると、科学技術やその産物が普遍的価値となり、多くの問題も解決に向かうことでしょう。

III 考えてみよう

- ・所属する学部・学部の教学理念を調べてみよう。何を学び、卒業時にはどのような力が身に付いているのだろうか。
- ・主体的に学ぶとは、どういうことでしょうか。具体的に考えましょう。
- ・正しい判断基準や行動基準を培うために、どうしたらよいでしょうか。具体的に考えましょう。

理系学部で自分の将来を創ろう

理系学部を選んだみなさん、キャリアデザインの観点で自分の将来の姿を描いてみませんか。その姿に近づくために専門分野での学修計画を立て、それを実行することは、理系学部で自分の将来を自分で創ることになります。

理工学部 教授 永井 清



理系学部で自分の未来を拓く

みなさんは、5年後の自分の姿や、10年後や20年後の自分の姿を想像できますか？

何年か先にみなさんは、好きな仕事にめぐり合えて生き生きと働いているかも知れません。大学院で興味深い研究に打ち込んでいるかも知れません。あるいは、自分で興じた会社を成功させるために、世界中を飛びまわっているかも知れません。

未来では、科学技術が発展し、生活が快適に、仕事が効率的になり、遊び方が広がるでしょう。医療技術が進歩し、健康で長生きでき、多くの病気が治るようになるでしょう。同時に、国内外で貧富の格差が拡大し、世の中が不安定化しているかも知れません。未来は誰にもわかりません。そんな未来に、自分がどこで何をしているかは想像しにくいと思います。

しかし、みなさんは、過去から現在まで生きてきました。視点を過去に移すと、未来自体を想像することはできなくても、みなさんは自分の将来を創って来たことになります。

大学に入ったみなさんには、自分で自らの将来を創ることを考えてほしいと思います。そして理系学部を選んだみなさんには、ぜひ、専門分野での勉強を活かして、社会で活躍すること、あるいは希望の職を得ることを、実現してほしいと思います。

主体的に行動しよう

大学ではまず、友だちを作ってください。人として大きく成長する大学時代と一緒に過ごす友だちは、同じ時代に同じ場所で、同じ専門分野で学ぶ大切な仲間です。みなさんにとって一生の宝にもなります。

大学で所属した学科での一連の授業を活かすかどうかは、一人ひとりの考え次第です。「自分の将来のために主体的に考えて行動する」ことを実行に移してほしいと思います。

具体的には、自分の将来の姿を思い浮かべ、その姿に近づくためにどうすれば良いかを考え、また、実際に行動して自分の将来に近づいて行くことです。このことは、「キャリアデザイン」や「キャリア開発」などと呼ばれています。大学では、みなさんのキャリアデザインを支援するために、「キャリア教育」などの授業とともに、「キャリアパス形成支援制度」などの支援制度を設けていますが、重要なことは、みなさんが、自分のこととして主体的になることです。

理系学部で自分の将来を計画し、実行しよう

もう少し具体的に言うとうなるでしょうか？みなさんはすでに、専門分野に関連して興味をもつものがあるかも知れません。あるいは、興味深いものがあったとしても、所属学科での勉強とどうつながっているかわかりにくいかも知れません。

そんな場合にはぜひ、友だちと話してみてください。何かヒントが得られるかも知れません。所属学科の先生にもぜひ、尋ねてみてください。大学の先生の多くは、専門分野での研究や教育が好きで大学教員になっているくらいです。喜んでいろいろ話をしてくれるはずです。

自分の将来を創るには、個々の授業を考えるだけでなく、一連の授業を通してどんな知識と能力、スキルを身につけられるかが重要です。そして、それが自分の力になったとき、みなさんのやりたいことができるか、希望の職業に就けるかを考えてみてください。海外で活躍したい人は、語学力を身につけ、海外の大学への留学を考えてください。専門分野での研究開発をしたい人は、ぜひ大学院に進学し、最先端の研究開発能力を身につけてください。進むにつれて見えてくるものが広がり、新たなことにチャレンジする気持ちが湧くでしょう。理系学部でみなさん自身の将来を創るための学修計画を立て、それを実行に移すことがみなさんの将来を創ることですし、未来を拓くことになります。